かわいそうなのはぬけない

かまぼこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ヤバイ宗教にハマった親に厳しく育てられ、風水的に良いという理由だけでわざわざ遠くの塾に通わせられ、中学生なのにバイトに明け暮れたせいで友達もできず、金をケチった親のせいで修学旅行すら行かせてもらえないし、せっかく稼いだお金はパチンコで溶かされ、ようやく会えた憧れの人からはパワハラを受け続ける。

そんな少女を少しでも救いたかった男が、寄せ集めのギルドとともに反逆する話。

※プリコネ原作の世界観の根幹に触れています。ネタバレになりますのでご注意ください。

目　次

虐待ネカマお兄さんではぬけない　1
強すぎて悪党に捕まったりしなさそうな女騎士たちではぬけない　16
宴の始まりであればぬかねばならぬ　36
猫耳娘に耳が四つあるとぬけない　54

虐待ネカマお兄さんではぬけない

親戚付き合いというものは実に厄介なものだ。

そんなことを考えながら、ある男が黒装束を纏いとある邸宅に赴いていた。

集まっては一見和気藹々としているように見えても、家庭によっては言葉の裏が飛び交う。

やれ夫が管理職になったとか、やれ息子が医大に合格したなど社会的地位の自慢大会が多い。このような不毛なやり取りでも、近所付き合いの多い田舎では村八分にならないための生命線になるのだから尚の事タチが悪い。

彼にはもう一人身内がいるが、性格が色々とアレなせいもあり、いつものように代表として単独で向かっていた。

幸い、男は著名人であったためか、他の親戚は大いに歓迎した。幾多の親戚が、少しでも名前を覚えてもらおうと男に話しかけてくるのに対し、そつなく対応する。

……葬式という不幸がきっかけに集まったというのに、どこまでも利己的な奴らだと内心で見下しながら、喪服の襟をいじる。その不幸の真っ只中にいるはずの者たちも同じような態度であったためか、さすがに辟易した男であった。

そんな場を、お手洗いと言って席を外して廊下を歩く途中。益のない宴会に巻き込まれる前に、そろそろお暇しようかと考えていた時のことであった。

男は中途半端に開いた襖が気になり、ふと視線を見やる。

そこには少女がいた。畳張りの部屋の隅で体育座りで俯いたまま、微動だにしない。

体調を崩しているのか気になったため、近くの親戚に聞いてみた。喪服すら着ていないことから、この邸宅の子どもかと考えていたが、実態は想像を超えていた。

曰く、よくわからない新興宗教にハマった家族の子供らしい。

保護者の親も、他の親戚たちに勧誘ばかりしてくるせいで、親戚一同からも鼻つまみ者として扱われているようだ。
そんな子供も当然に居場所はなく、かといって親に付いて行かせるのも憚られるため、仕方なく部屋でじっとしてもらっているとのことだった。
こんな時も勧誘活動するなんて肝の据わった根性だな、と苦笑いを浮かべながら。
その話を聞いた後、男は改めて例の少女を見やる。
俯いて隠れていた頭に、一部だけ変色した髪が見受けられた。
そして、あれは染めているのではなく、地毛であることも理解してしまった。
少女は怒っているのか。
泣いているのか。
恥じているのか。
それとも、何もかも諦めているのか。
その光景に対し、男は何を思ったのか。
それを確かめる前に――――――時間切れとなった。

男は、邸宅を後にする。
結局、少女と言葉を交わすこともなかった。
……ただ、男は後に、誰かにこのように語った。

思えば、あれが俺たちの分岐点だったと思う、と。

◆◇◆◇◆

ランドソルでの生活基盤においてギルドとの結びつきが強い国だ。
遠くない未来でも、どこかの腹ペコ娘が「ギルド専用の飲食店がある」と言う理由でギルド結成に奔走していたりする。貴族の令嬢だったり、学園の生徒たちだったり、非公認ではあるが構成員全員の合計年齢２７歳の子供たちですら「とりあえずギルド結成しておこうぜ」とランドソルではぽこじゃかと生まれるものだ。数が増えすぎることにより、管理側であるギルド管理協会も認可の制限を設け始めているが、それは別の話。
とにかく、活動目的がどうあれ、何かしらギルドという組織に属しているか否かで生活の幅が大きく変わってくるのだ。
そんなランドソルの外れ。
森という森、地下という地下を潜りぬけ、常人どころか魔物すら寄り付かないような僻地で、なおかつその中にある仕掛けを越えた先にも、とあるギルドの活動が行われていた。
書斎……もはや図書館と見間違うほどの蔵書が敷き詰められた棚に囲まれるように、一つの長机がぽつんと立っている。その上座に座る少年のような、それでいて青年のような男は、騒がしくなった外の様子を察して、沈黙を切った。
「えー、というわけで、これから我ら【アストルム帰宅部】の定例会議を始めたい、と、思うんだけど――――――」

「悪い！　遅れた！」
「すまない！　遅れた！」
「二時間遅刻だブゥワッカヤロウ!!!!」

身長の二倍ほどの高さの本棚も倒れそうなほどの圧が込められていた。図書館ではないが、常人なら静かにしなければならない気がする雰囲気でも関係なしにブチ切れた。
そんな空気を読まない圧力を受けたノウェムとマサキは「あっこれはまずい」とヘラヘラした顔を引っ込める。

「お前らぁ……一応弁明聞いておこうか……？」

ボリボリと、メッシュがかかった白髪を掻く。
怒ってしまったが、なんだかんだこのギルドの皆は厄介な事情を抱えている者たちだ。
追手などを撒くために時間がかかっていたのであれば、さすがに責められないなと冷静になろうと――――――

「オクトーの様子を見てたらすっかり忘れてた！」
「うむ！　ネネカ様のお伴をしていたらすっかり失念していた！」
「よーし、拳骨いくぞー。歯ぁ食いしばれー」

完全に杞憂だったのでお仕置きすることにした。

「まあ、ゆるーく行こうと思っているけどよ、さすがに連絡なしに二時

間待ちぼうけってのはどうかと思うんだよ。父ちゃん涙出てくるわ」

街中であれば数百メートル圏内であれば誰もが聞こえるような大声を出しても、外に漏れることはない。元よりこの拠点は、ランドソルどころかアストライア大陸全土を監視しても見つからない場所に位置している。構成員が構成員のため、半端な隠匿性では拠点として困るのだ。

こうして、涙目で変な悲鳴を上げたノウェムの声も、外に聞こえる心配はなかった。

「ノウェムはともかく、せめてマサキは頼むぜ。お前、普段そんなだけど一応国家公務員だろ？　つーか、ネネカのやつはどうしたんだ？」
「面目ない！　ちなみに、ネネカ様なら『どうせ無駄な会議なんでしょうし、貴方に任せます』と仰っていた！　ご多忙な身故、何卒容赦してほしい！」
「そもそも出る気なかったと。俺、そんな人望ないのか……？」
「なーシャルルー。アタシもう行っていいかー？」
「自由かお前ら」

シャルル、と呼ばれた青年は盛大にため息をつくも、誰もフォローしてくれないことにさらに落ち込む。

これから要件話すからちょっと待ってろ、と気を取り直したのはいいが、ノウェムはえー、と不服そうにする。

「だって、またギルド名のことだろー？　ずっと【天楼覇団剣】で良いって言っているじゃんかよー」
「うむ！　ネネカ様ではないが、私個人も毎度無駄な会議に時間を割く必要はないと思う！　ちなみに私は【ネネカ様と讃える私～その他を添えて～】が良いと何度も言っているではないか！」
「うるせぇよ。お前ら自分のアイデンティティー主張しすぎだっつーの。特にマサキとかなんだ？　料理か？」

このギルド、構成員の我が強いせいか、まだギルド名すら決まっていないのだ。ちなみに、ここに居ないネネカはこの件に関しては特に関心を示していないが、マサキの案だけは却下していた。無念。
確かにそれも重要な議題であるが、本題はそれではなかった。
シャルルは先ほどまでの苦笑いを引っ込めると、一変して空気が変わった。ノウェムもマサキも、何かを察したのか即座に口を閉ざし、身構えるように彼に視線を向ける。

「マサキ、【迷宮女王（クイーンラビリンス）】のプリンセスナイトが見つかったってマジなんだな？」
「……うむ！　ネネカ様からの情報だ！　間違いない！」
「そうか。俺も情報に聞いた特徴の少年が落ちていったのを観測した」

裏付けが取れたな、と口にするシャルルは納得した。彼自身は、その少年との直接の面識は一回しかない。
理由あって一部の記憶が無くなっている彼としては、何度も戦ったと聞いているネネカの情報と照らし合わせてから動きたかった。その件の少年こそ、このギルドの目的にとって重要なピースだから。
そんな朗報を聞き、ノウェムの顔が一気に明るくなった。彼女も相棒――今は離れ離れになっているが――とともに何度も少年と戦い、最後は結託した腐れ縁とも言える仲だ。特に、完全に記憶を保持している彼女こそ、少年の力をこの場の誰よりも理解している。

「いよっし！　アイツがいるなら――――――」
「ただ、他の者と同じく記憶がさっぱり無くなってしまっているようだ」

途中でマサキの割り込んだ言葉には、期待しているところ悪いという色が見えた。ノウェム自身、予想はしていたことだが少しばかり落

胆する。
覚えている身としては、忘れられることはどうしても辛いのだ。
「それどころか、一般常識や身についた基礎的な生活習慣も失ってしまっている。ネネカ様は肉体だけ蘇ったようだ、と形容されていた」
他の者は、こちらの世界との整合性を合わせられているが、過去や生い立ちなどはあちらの世界と大きく乖離することはないようにされている。
少年は過去のどの事例よりも酷い状態であった。
もはや、赤ちゃんと例えても過言ではない。そんな彼に再び立ち上がってもらうには、相応の準備が必要になるに違いない。
それでも、とシャルルは口を開いた。
「――――――これで状況が動く。晶も真那のヤロウも、もしかしたら他の【七冠】も動き始めるかもしれない」
こちらの世界で、実質的な支配者として君臨している者。
彼女らの動きも本格的になることは充分に想像できる。シャルルはギルドの構成員たちを見渡すと、二人とも力強く頷いた。
「ネネカ様は引き続き情報収集と、加えて彼の支援をされるご意向だ。私もそれにお伴する！」
「アタシはこのまま他のヤツらの記憶の状況を調べるぞ！」
「なら、俺も他の【七冠】とそのプリンセスナイト探しを継続か。ま、やることは今までと変わんねぇか」
己の意図を視線だけで理解した二人に満足そうに笑うシャルル。
この世界の創始者の一人であるネネカと、彼女のプリンセスナイトであるマサキは、分身などを使った諜報活動。
ノウェムは、己があちらの世界にいた時に調べた者たちについて、

こちらの世界での生い立ちの調査と比較。
そして、シャルルはこの世界に他にもいるだろうこの世界におけるキーパーソンたちの捜索。
今までどおり、やることは変わらない。
こちらの世界からの脱出、およびあちらへの帰還――――――彼らの目的は多々あるが、このギルドの最も重要な課題である。

「いよっし！　皆！　俺たちは必ず現実に帰還するぞ！　【アストルム帰宅部】！健闘を祈――――――」
「【天楼覇団剣】！また会おうぜ！」
「全てはネネカ様のため！　諸君！　頑張ってくれたまえ！」
「ギルドマスター、俺なんだけどな!?」

なお、ギルド名はまだない。

◆◇◆◇◆

そんな会議を終えた【ネネカ様と讃えるアストルム帰宅天楼覇団剣（仮称）】。
ノウェムもマサキも出て行き、再び一人となったシャルルは、おもむろに本棚からひとつの本を取り出す。そこにはピンク色の一枚の栞が挟まれていた。

「終わったぞー、ネネカ」

栞を机に投げ、更にその先のソファに着地すると、突如栞が光に包まれる。瞬きをする間に人の形へと戻り、足を組みながら無気力そうな視線を向ける。
子供のような容姿と侮るなかれ。

彼女こそ、この世のあらゆるものに成れる【変貌大妃（メタモルレグナント）】。
世界の支配者【七冠（セブンクラウンズ）】のひとりに連なる存在――――――ネネカである。

「よくわかりましたね。ここに居ることはマサキにも伝えていないのですが」
「この程度見抜けなきゃお前の相手は務まらねーよ。つーか、マサキにも嘘ついたのかよ。お前のプリンセスナイトだろ」
「嘘はついていませんよ。実際、他の私は別件の対応をしています」

しれっととんでもないことを口にしているが、今更シャルルは驚くこともない。分身と変身――――――彼女の権能は相変わらず便利だなと片付けるだけにして、シャルルは本題を口にした。

「――――――で、わざわざこんな回りくどいことをするってことは、俺と内緒話をしたいってことでいいんだよな？」

ノウェムやマサキがいる場では話せないことがあるからこそ、この状況を作った。
会議に参加しないと嘯いてまで、本の栞に姿を変えて待っていたことを鑑みれば、この意図は充分に察することができるだろう。

「予想通りの反応、ありがとうございます」
「おっ、まあ、一応ギルドマスターだしな」
「ええ。ただ、集まるまであれほど時間がかかったのは予想外でした。結果論ですが、これなら始まる前に私の意図を察してくれれば効率的でした。次からは直前にもリマインドしなさい」
「……へいへい。ご助言どうも、ネネカ先生」

ダメ出しを受けたシャルルは不貞腐れながら頬杖をつく。そんな態度は意に介さず、フォローもせず、さて、とネネカは無視した。

「先ほど話があったとおり、かのプリンセスナイトがこの地に降りました。貴方が言ったとおり、これから状況が大きく動くことでしょう。だからこそ、改めて確認させてください」

一息呼吸を挟み、さらに本題に切り込む。

「本当に千里真那と敵対するのですか？

――――――元々は真那の側に居た貴方が」

空気が重くなる。

ネネカは真っ直ぐと、シャルルの目を射抜くように見つめている。その瞳には、一切の虚偽をも見逃さないと言う確かな意志が宿っていた。そんな世界の支配者に睨まれていても、シャルルは臆することなくいつもの調子で答えた。

「おいおい、今更聞くかそれ？　ネネカだって、前はアイツの協力者としてあのプリンセスナイトと戦ったって聞いたぞ？」

「……最後に切り捨てられましたが。真那の企みは今の私の目的に反しますし、今回は対立するでしょう」

目を閉じれば、あの時の記憶が甦る。

世界の再編により、無くなってしまった前世と現実の記憶。シャルルとノウェムの協力により、ある程度復元させることができた。その中にも前世の最後の戦い――――――ソルの塔で、背後から真那に切られたことはネネカの中で少なからず私怨として燻っている。口にはしないが。

「私はともかく、貴方の場合は違います。このアストルムの前――――――いえ、ウィズダムで私達が手を取り合う前から、真那の味方であった貴方だからこそ、確認しなければなりません」

そういうことか、とシャルルは納得した。
形はどうあれ――――――ネネカが目の敵にしている千里真那と共にいたからこそ、慎重にもなるのは理解できる。事実、世界の再編後のしばらくの間は、実際に行動を共にしていたのだから。

「言うまでもない。前世では不干渉を貫いたが、今世は違う。この世界で、俺とアイツはある一点において決定的に対立した。それは今も変わらない」

シャルルは断言した。
今までの緩かった雰囲気を一変させ、固い決意を示す。覇気が込められ、纏う空気はネネカにも決して劣らない存在感であった。
……ほんな僅かで、それでいて永遠のように思える沈黙。
それを破ったのは、ネネカのため息だった。

「……いいでしょう。以前、聞かせてもらった対立の理由と、今まで貴方から受けた支援、そして貴方のその珍妙な状態に免じて、今日はこのあたりにしておきましょう」
「そうか……おい、なんかお仕置きみたいになってねぇか？　しかも最後、普通に〝変なヤツ〟って言ったよな？　悪口か？」
「気に障ったのなら謝りません」
「いや謝れよ」

用が済んだとばかりに立ち上がり、部屋を後にするネネカ。この会話で何か状況が進展するわけではないが、彼女にとっては重要なことだったのだろう。シャルルはそういうものなのだろう、と完結させる。
ただ、と言い忘れたことを思い出したのか、ネネカはシャルルの方を振り返らないまま言葉を紡いだ。

「できれば、この関係が続くことを祈っていますよ」
「……ああ。一度真那に裏切られたお前が、限定的とはいえ、こうして俺と手を組んでくれたんだ。その期待に裏切らないように、俺なりに筋は通し続けるさ」
「……やはり、貴方からそんなお人好しの好青年のような言葉が出てくると寒気がしますね。調子が狂うので、その口を閉じてください」
「さてはお前俺のこと嫌いだな……ってもう居ねえし」

少し目を離した隙に、ネネカは消えていた。
元々分身だったのか、それとも何か小さいものに変身したのかはわからないが、特有の気配がなくなったので、今度こそこの部屋で一人になったことを確認し、背もたれに深くもたれかかる。
どっと疲れが押し寄せる。
前の世界でも、とあるギルドのマスターをしていたが、こんな経験は初めてかもしれない。構成員の変人振りは今の方がマシなはずなのに、何が違うんだろう、と考えたが、止めておくことにする。実は彼自身も、好き勝手行動して迷惑をかける側であったことを思い出したからだ。
今は亡き……否、現実(あちら)で何とか生きてくれているはずであろう、かつての常識人枠の仲間に心で敬礼をしながら、椅子から立ち上がった。

「さてと、行きますかね」

彼もまた、当面の目的のために拠点を後にする。
目指すは首都ランドソル。彼の探す【七冠】や【プリンセスナイト】が誰か居るかもしれないと軽く考えながら、街から大きく外れた洞窟の中に降り立った。
丘を登った先に見える白い城、ランドソル城を眺めながら、シャルルは王宮でのかつての主君とのやり取りを想起した――――――

『いや、お前さすがにアレはないんじゃねぇか？　よくもまあ、あんなに必死に頭下げているヤツの首をすっ飛ばすとか言えるよな。クリスだってあそこまで言わねぇぞ？』
『いちいちうるさいわね。キャルは私の忠実な下僕として仕えられる、私はキャルを玩具にする、お互い合意の上じゃない』
『合意って言葉をもう一度データで調べなおせよ天才様。というか、少しは可哀想だなとか思わないのかよ』
『可哀想だからいいのよ。むしろあっち――――――まあそこはどうでもいいわね。貴方こそ、甘やかしすぎて鬱陶しがられてるのに気づいていないのかしら？』
『……いや別に、誰かさんのフォローしてやっているだけだし。はー、これからまたフォローしないといけねーじゃん。加減しろバカ』
『とか言いつつ満更でもないのでしょう？　父親面しているように見えて、実のところ年下相手に媚び売っているだけじゃない。はっきり言って気持ち悪いわよ。一昔前はパパ活って言ったのかしら？　牢屋だったら好きな部屋を選ばせてあげるわよ？』
『人の皮を被った悪魔め……いや、今は女の皮を被ったネカマ野郎か……』
『あ゛？　ぶっ殺されてぇのか？』
『なんだァ、テメェ……？』

そんなこんなで、互いにキレた二人は王宮が半壊する寸前まで戦い、怒りのあまり我を忘れた真那がシャルルを盛大に吹き飛ばして終わりとなった。

その後、飛ばされた先が魔物たちの巣窟となった海上の塔だったり、上階から下階へ降りる際に居た魔物やシャドウがまともに相手したら敵わないほどに強力だったりして本気で死を覚悟したシャルルであったが、本人としてはこうして生き延びた以上、捕まって魔力を生み出すだけの苗床にされなかっただけ何十倍もマシと割り切っていた。

ただ、真那との間には決定的に確執が生まれてしまった。今更戻るつもりもないため、こうして現実（あちら）の世界に居た頃に面識のあった者たちを集めた。

別に、前世のように面白おかしく暮らすだけなら結成しなくても良かったが、真那からの追手に対抗、自衛するため、非公式ではあるがギルドを結成したわけだ。ネネカとの接触など問題は色々あったが、こうしてなんとか無事にやれている。

ただ、彼の中には懸念がひとつ。

それは真那ではなく、真那の側に仕えるひとりの少女のこと。本人は知らずに、今まで共にいた主君と決別するきっかけとなった存在。彼女と戦うことになるのは、本当に気が進まない。

『や……やった！　ついに魔物を操れるようになったわ！　これで陛下もお喜びに――――――――え、記念に美味いもん食べに行く……って、ちょっ!?　いきなり腕引っ張んな！　頭撫でるな～！　ぶっ殺すぞ！』

「あいつに、剣、抜けるかな……」

ポツリと溢した独白は、風の中に消える。

堂々巡りになると考えたシャルルは思考を止めて、芝生の上に寝転ぶことにした。

強すぎて悪党に捕まったりしなさそうな女騎士たちではぬけない

ギルドとは言え、全員が常に行動を共にしているわけではない。
ノウェムは記憶を失った相棒のいるランドソルへと足を運ぶし、かと言ってネネカは自室に引き篭もって研究に没頭し、マサキはその助手として補佐する。この拠点を提供しているシャルルも、あまりランドソルには近づかないものの、身を隠していそうな【七冠】がいないかと、開拓中である大陸などに行くことが多い。
今日は、そんなシャルルが全員集合をかけた日のことであった。

「前から思ってたけど、ノウェムのそれ――――――――カッコいいよなー」

いつにも増して緊張感がないシャルルの言葉。
今回は時間前に来たノウェムはすぐさま反応して、嬉しそうにシャルルのもとへと近づいた。

「おっ、シャルルもアタシの天楼覇断剣の良さがわかるのか!?」
「だから再現したんだしな。それで、使い心地はどうだ？」
「おう、バッチリだ！」

両手で、柄の感触を確かめるノウェム。
実は、今回の招集目的とは別に、シャルルはノウェムを呼び出していた。
世界が再構築される際に失った、彼女愛用の武器。
チート満載の武器だったせいでバグとして排除されたのか、それとも原型がこの世界のどこかにあるのかわからない。
ただ、今後のことも考えて、武器がないのは困るだろうと、シャルルとネネカは贋作を用意した。今は最終調整のために、本人に感触を

確かめてもらっている。

「ただ、ずっと使うのは疲れるんだよなー。どうにかならないのか？」

「それは無理だ。お前の体力がないのが悪い」

実際、前世でも完全に使いこなせていなかった。

少しだけ逞しくなり、前よりは使えるようになったかもしれないが、どうしても体格の問題は一朝一夕で解決するものではない。

えー、とブー垂れるノウェムだが、こればかりは今後に期待するしかないと切り捨てた。

「いい機会だろ。あっちでも超能力に頼りすぎていたし、もうちっと自分を鍛えろよ」

「ぐぬぬ……じゃあここで素振りしていいか？」

「お前ここ吹き飛ばすつもりなの？」

その武器の威力を誰よりも知っている本人がこの調子なのだ。常に振り回せるようになったら本当に抑えられる者がいなくなる。

口にはしないが、そういう意味でも少しくらいの制限は許容してほしいとシャルルは考えていた。

ならさ、とノウェムは代替案を提案する。

「取り出す演出はどうにかならないか？　アレ、凝っているし好きなんだけど、長くて戦いの最中に攻撃されそうで怖いんだよなー」

「は？　俺が監修した演出を削るとかふざけてんのか？」

「お前のせいかよ！」

彼女の剣は、使用しない時は別空間に収納している。それ自体はゲームならなんてことのない、アイテムの収納ギミックの応用である。しかし、それを取り出す際に発生する魔法陣や光の演出には匠の並々ならぬこだわりが詰まっていた。

故に、匠（シャルル）、キレた。
ノウェム……だけでなく、今後現れるかもしれない、演出中に攻撃するような無粋な敵たちに。
「だって〝切り札〟感あってカッコいいだろ？」
「いやまあカッコいいけどさ……」
「だったら良いんだよ。俺的には、お前の〝現出せよ〟って口上、いいセンスしていると思うんだけどなー」
「そうか？　いやいや、それほどでもあるぞ！」

チョロい。
丸め込めたと思う反面、彼女の将来が少し心配になるお父さん思考が出てしまったシャルルであった。
普段なら超能力で心を読めたり、仮に読めなくても相棒が小馬鹿にするように止めてくれるだろうに。

「安心しなさい、ノウェム。演出は省略できるようにしてありますよ。あとで方法を教えます」
「ネネカ！」

そんな思考に水を差す平坦な声。
聞こえた方向を向けば、ネネカが半透明な椅子に座ったままやってきていた。
ちなみに、ネネカの座ったままの椅子を移動しているのはマサキであった。明らかに体力の無駄なことをさせているなー、なんて思った二人だが、本人がとても良い笑顔をしているので、スルーして話をそのまま進める。

「ネネカ！　なんてことしてくれるんだコノヤロウ！　俺が一週間かけて考えた演出を飛ばすとか、人の苦労を何とも思わないのか!?」
「その言葉――――――作業の八割を私に丸投げしてきた貴方にその

まま返しますよ」

ぐう、とシャルルは撃沈した。

何もしていないくせにまるで自分の成果のようにひけひらかすシャルルに、さすがにネネカも不機嫌になる。

マサキにこんな無駄なことをさせているのも、おそらくそれが原因だろうと、傍からみていたノウェムは思った。それでもやはり本人は幸せそうな顔をしているので、あえて何も言わなかったが。

この二人については、主従とはいえ前はもっとビジネスライクな関係だったと記憶していたはずのノウェムだが――――――それよりも言わねばならないことがあった。

「つーかシャルル、何アタシに『自分が作りました』みたいに言ってきてんだよ……」

「――――――」

屈託のない、困ったヤツを見るようなノウェムの視線がシャルルのトドメとなる。

はじめはソファにいたはずのシャルルは、気がつけば床に頭をこすりつけていた。『あまりにノウェムが喜ぶから、お父さんつい調子に乗ってしまった』などと供述していた。

「さて、無駄話は終わりです。シャルル、はやく私達を呼んだ理由を教えてください」

「あ、悪い」

床から頭を上げ、身を投げ出すように椅子に背中を預け、腕と足を組む。

偉そうな格好をしているが、この男は変にカッコつけて赤っ恥をかいたギルドマスターである。

だが、口にした内容は至って真面目な話。

シャルルは重々しく、メンバーを集めた当初の目的を話し始めた。
「【跳躍王(キングリープ)】のプリンセスナイト――――――鬼道大吾が見つかった。俺達はこれから、王都に搬送中のアイツを奪還する」
――――――それは、彼らの新しい同士を迎え入れるための作戦会議であった。

◆◇◆◇◆

「畜生！　出しやがれこのっ！」
ガンガンと鐘を打つように、金属が叩かれる。
集落から外れた木々が生い茂る山道にはいささか不釣り合いな音と怒号が、馬車から聞こえる。
「団長、助かりました。我々では手に負えず、面目の次第もございません」
「気にしないでくれ。私も標的の強さを見誤っていた。君たちの手当を終えたら出発しよう」
ハッ、と無骨な鎧を纏う者たちは、さらに無骨な黒鉄の鎧に礼をして散開する。
各々が帰還の準備を進めるのを黒鉄の騎士、ジュンは見届ける。
彼女が率いる王家直属のギルド【王宮騎士団(NIGHTMARE)】は、遠征としてランドソルから少し離れた山にいた。
請けた命は、反乱分子の確保。
首都から離れた僻地で名を馳せている喧嘩屋。今はまだ何も問題ないが、首都近くの街でその姿が目撃されたとの情報があった。やが

てランドソルで暴れ回ることを憂いた王宮は、事態を重く受け止め騎士団を派遣するに至った。
以上がこれまでの経緯であるが……ジュンは今になって首を傾げる。
遠征自体は訓練でも行うし、観光地の治安維持のために騎士の派遣なども請け負うことはある。しかし、本来なら王宮やランドソルを守ることこそが役目。
彼女自身、真夏のビーチであろうと鎧のまま警護の応援にかけつけるほど仕事は選ばないし、実際街の外まで出るまで何一つ疑問を抱いていなかったジュンであるが、少しだけ妙かもしれないと思ってしまった。
実際、件の喧嘩屋は手強かったので、結果的には良かった。他の団員も特に疑問を感じていない。自分の代わりに門番を任せてきた副団長が心配で、つい神経質になってしまったかなと思考を打ち切ることにした。

「ジュンさん、今大丈夫ですか？」
「ああ。どうしたんだい、トモちゃん」

ジュンに近づいてきたのは、一人の少女騎士。
まだ見習いであるが、現場経験を早く積んだ方がいいと判断して連れてきたトモである。
何やら、顔色が優れない。実戦で緊張しているのかとジュンは心配したが、別の理由があった。

「実は、ここ周辺に妙な魔物が確認されていて……」
「妙な魔物？」

実際に見てもらった方がはやいですね、とトモはジュンを連れていく。
他の騎士が混乱するのを防ぐために岩陰に隠していた魔物を見た

ジュンは、兜の内側で目を見開いた。

「……どういうことだ、姿がブレている？」

確かに四足歩行の魔物がいることはわかるが、ブレた転写魔法のように輪郭がはっきりしない。

瞬きをする間に姿がはっきりしたり、不明瞭になったり。疲れ目なのかと錯覚してしまうほどに奇妙な状態だ。そんなジュンの反応をみたトモは、ほっと胸をなでおろす。

「良かった。私の目がおかしいわけじゃなかったんですね」

「……大丈夫だよ、私もトモちゃんと同じように見えている。怪我人は？」

「誰もいません。そこまで強力ではありませんでしたから。ただ、生存力が相当なもので、倒し切るのにかなり時間がかかりましたけど」

トモは少し疲れた顔を浮かべる。

元より彼女は腕っ節よりは手数で戦う剣士だ。タフな魔物相手だと時間がかかってしまうのも無理はない。

ともあれ、不穏な予感が過る。

手当は後にして、一度ここを離れたほうが懸命かもしれないとジュンが指示を出そうとした――――その時だった。

「団長！　報告します！　我々の馬車に向けて、魔物の群れが押し寄せています！」

ジュンも含めた、団員たちが一斉に振り向く。

「数は？」

「視認できる限り、我々の隊と同じ数かと！　また、魔物の姿が何やら怪しく……」

「……あっ、もしかしてこの魔物みたいに――――――」

トモが改めて倒した魔物へと顔を向ける。

だが――――――既に姿はなく、まるで水が地面に吸い込まれるように跡形もなく消え失せていた。

「っ、ジュンさん！」

「罠か……」

おそらく、トモが倒した魔物は目印の役割なのだろう。仲間がやられた場所を察知し、群れで襲撃して報復する習性のようなものか。

……いや、習性だけでは片付けられない。手段はわからないが、タイミングといい明らかに人間の意図が感じられる。

だが、今は窮地を脱することが先決と考え、ジュンは的確に部下へ指示を出す。

「各隊は、魔物一匹に対して三人体制で対処に当たれ。異様に生存力が高い。確実に急所を狙って仕留めるんだ」

「残りの魔物は？」

「――――――私が食い止める」

ジュンは、腰に携えた黒剣を引き抜く。

数をひきつけた上での耐久戦は彼女の得手だ。

文字通り市民の盾となる騎士の在り方こそ、平民貴族問わず団長として王宮騎士団から絶対的な支持を持つ理由である。

「トモちゃんは馬車の護衛を頼むよ。危なくなったら、怪我人とともに避難してね」

「わかりました」

トモが頷くのを確認した後、ジュンは部隊を連れて離れていく。他

の騎士よりも腕がたつと自負しているトモだが、そもそも自分は団長の厚意でここにいる身。
……欲を言えば自分も掃討戦で活躍したいと思う願望はあるが、命令には絶対遵守だ。
それに、この馬車も重要なポイントだ。
ジュンは口にしなかったが、仮にこの魔物の襲撃が、何者かに仕組まれているのであれば――――――狙いはここになるはず。

「どけどけぇ！　ノウェ――――――ああ違う！　大悪党のお通りだ！」
「な、なんだ!?」

であれば、時間差でここも襲撃があるに違いない！
予想通り現れた賊が、他の騎士たちを素早い動きで翻弄する中、トモは剣を抜いて突貫する。

「――――――お、俺は馬車を安全な場所へ移動する！」
「わかった、頼んだよ！」

ここも安全ではないことがわかった以上は、ジュンの指示通り、この場を離れるのが得策だ。トモとしては、すぐに御者台に別の騎士が現れてくれたのは大変都合がいい。

「……あれ、部隊の人数って」
「余所見する余裕あんのかっ！」
「どうか、なっ！」

死角から迫りくる片手剣を受け流した。
もうここまで突破されたのか、と苦虫を潰した顔のトモは剣を構え

る。フードを被った襲撃者を前に、一瞬だけ覚えた違和感も消え失せてしまう。
対照的に、襲撃者はヒュウと口笛を鳴らす。
「オマエ、なかなかやるな！」
「悪いヤツに褒められても嬉しくないよ！」
「そうだ、アタシは悪いヤツだ！　よくわかってるな！　ますます気に入ったぞ！」
「今の言葉で喜ぶ理由がわからないね――――――他の皆さんは馬車の護衛を！　平原の方へと避難しました！」
「チッ……わかった！」

平民出の新兵に指示されたのが気に障ったのだろうが、やるべきことはわかっている。襲撃者によって一度は地面に伏せられた騎士たちは、渋々ながらも馬車の方へと駆ける。
「あっ、行かせるか――――――《天楼覇断剣》！」

トモから距離を離すと、今度は宙から大剣を振り抜いた。
たかが一振りで地面を抉り、斬撃と呼ぶには大きすぎる衝撃波は馬車の去った方角へと突き進み――――――騎士たちを吹き飛ばす。
「……あの剣、振らせたら不味いね」

直接向けられていなくても、余波だけで気を失いそうになるトモ。おそらく、あれが襲撃者の切り札だ。
しかし、これは好都合かもしれないと考え方を逆転させる。あの大きさであれば、スピードを活かした身のこなしは使えないはずだ。
振らせる前に仕留める――――――！
この場にいるのは、正義の騎士と大悪党。
であれば、もはや言葉は不要だ。

今度はこちらが翻弄させる番だと、臆することなくトモは襲撃者であるノウェムに立ち向かう。

◆◇◆◇◆

『作戦はシンプルにいく』

そう言いながら、シャルルは兵士の駒を動かす。

彼の前にはチェス盤が広がっている。

対面に相手はいないが、相手側の駒も彼自身が動かしている。

『マサキはターゲットの周囲に魔物を放って騎士たちを襲わせろ』

『陽動だな！　実験も兼ねて、それなりの魔物を放つが構わないか？』

『大丈夫だ。ジュンちゃんがいれば、死人はでないだろ……つーか、お前、何やってんの？』

『今の私はネネカ様の椅子だ！　気にしないでくれ！』

『……おう！』

『なあ、そのチェス意味あんのか？』

シャルルはツッコミを放棄した。

ノウェムの質問もあえて無視して進める。

続いて、シャルルが動かしたのは騎士と魔法使い。視線はノウェムとネネカに向けられていた。

『ノウェムと俺はターゲット近くに降下して護衛の騎士を叩きのめす。そのどさくさに紛れて、ネネカはダイゴを逃がす。二人とも、そういうの得意だろ？』

『順当ですね。順当すぎてつまらないくらいです。反省してください』

『なんで順当なのに説教されなきゃなんねぇんだよ』
『なあなあ、だからそのチェス意味あんのか？』

ネネカにはツッコミを入れたが、ノウェムの質問は再度無視するシャルル。

これが【ダイゴ奪還作戦】の大まかな内容だ。

残りの会話は、無視され続けたノウェムがムキになってチェス盤をひっくり返したり、ネネカの椅子になっていたマサキの手足がブルブル震えていたなど、不毛なやり取りしかないので割愛することにする。

ただ、この作戦で肝要だったのはスピードであった。

たとえ彼らが特出した強さがあるとしても、相手は王宮直属の精鋭たち。連携を取って冷静に対処されれば、数で劣るシャルルたちはすぐに制圧されてしまう。

故に、彼らが取れる手段は奇襲しかない。

交戦（エンゲージ）の主導権を握っていることを活かした電撃作戦でなければ、敵を出し抜くことは困難を極める。実のところ、綱渡りをしていたのはシャルルたちの方であった。

「――――というわけです」
「いや何がだよ!?」

現に、作戦が全て噛み合ったおかげで、騎士に変身していたネネカは、ダイゴの牢がある馬車を確保することができた。

さらに御者席から馬を操りながら、今までの経緯を説明したが、ダイゴとしてはすぐに状況を飲み込むことは無理があるようだ。

「ちなみに、チェスの件は特に意味はありません。あれは突然〝チェスをしながら作戦会議をすると一割増しで賢く見える〟という持論を展開した彼が勝手に検証しただけです。私には三割増しで滑稽に見えました」
「だからンなの知らねぇよ!?　ていうかお前誰だよ!?」
「口の聞き方がなっていませんね。こう見えても私は貴方より年上ですよ」
「は？　何言って――――――え、マジ？」

沈黙をもって肯定するネネカに、目を見開くダイゴ。
いつものダイゴならデリカシーなく年齢を尋ねるだろうが、何よりネネカの纏う空気がそれを許さなかった。実際、彼女自身はそこまで気にするほどの年齢ではないはずだが、ダイゴの野性的な勘が「これはアウト」と警鐘を鳴らしていたのだ。
詮索は身を滅ぼすと、判断したダイゴは乱雑に掻いて、話題を変えようとする。
そう言えば、ネネカの話にひとつ気になることがあった。

「あと一人はどうしたんだ？　アンタの話では二人で襲撃するって話だったが、あのちっこいのしかいねぇじゃねぇか」
「ああ、彼なら――――――」

『よーし、早速降下するか。各自、準備はいいか？』

作戦開始の直前。彼らは雲の上にいた。
少しでも移動を短時間にするためにも、自前の小型飛空艇を使用したのだ。

まもなく現場へと到着しようとする中、シャルルは腕を振り回しながら、メンバー三人の顔を見渡す。
怖気づくこともなく、闘志を燃やしている二人に対し、ここで待ったをかけたのは意外にもネネカであった。
『それより、シャルル。着地の方法はどうするつもりですか？』
『あん？　そんなの、お前の魔法で――――――』
『貴方はそれでいいのですか？』
言い終わる前に、ネネカはピシャリと言葉を被せる。
『……どういう意味だ？』
珍しく、シャルルの方が訝しんだ。
実際、ネネカが何を言いたいのか理解できていなかった。作戦の内容は〝順当〟と言っていたのを憶えている。異論があるわけではないのであれば、一体何なのだろうか。
『……いえ、貴方ならもっと〝カッコいい〟方法があるのではと思っていたのですが』
『え』
シャルルだけではない。
意外な発言に、さすがのノウェムも目を見開いてしまった。
余計なお世話でしたね、気にしないでください、と会話を打ち切ろうとするネネカであったが、今度はシャルルの方が待ったをかけた。
『……いやあるけど？　あるけどさ、この高さは無理だろ？　さすがに死ぬよ？』
こちらの世界の飛空艇は雲の上までは届かないにしても、それでも

落ちたら潰れたトマトのようになる高さだ。
　さすがに苦笑いするシャルルに対し、ネネカは優しく微笑む。短い付き合いではないからこそ、彼の構造（ツクリ）はよく理解していた。

『ええ。普通の人間なら死ぬでしょう。ですが、貴方はカッコよさと安全性なら、どちらを優先するのですか？』
『そんなの――――――カッコいい方に決まってんだろ!?』

　この男――――――重度の見栄っ張りである。
　好きな褒め言葉は〝カッコいい〟。嫌いな言葉は〝ダサい〟。
　かつて王宮にいた頃、いつもの白と青を基調にした甲冑から黒と赤にイメチェンした際、猫耳の女の子に「ちょっと自分と色が被ってててキツイ」とディスられた時は三日ほど引きずったりした。
　と、そんな性格を本人は〝美学〟と称しているが……要はただのアホである。
　そんなアホがここまで言われてしまったら、当然引き返すこともなく。

『なら……わかっていますね？』
『おう任せろ!!　鳥になってくるぜ!!!』

　甲板を駆け、空の海へと身を投げるシャルル。
　飛び込みの競技であれば、満点を出しても構わないほどに綺麗なフォームであったと、後に観客は語った。

一連のやり取りを終え、さて、と言いながらネネカはハートの形をした杖を振り回す。先程までの微笑みはどこに行ったのか、いつも通りの淡々とした無表情に戻っていた。

『ノウェム、私達は魔法を使って降りますよ』

『お、おう!! まさか本当に飛ぶとはな……』

『ネネカ様!!!!!! 私も鳥になってきます!!!!! 私の華麗な飛行、是非ご覧ください!!!!!』

『何を言っているのですか。貴方は私の風除けになりなさい』

『承知しました!!!!』

「————と言うことがありました」

「鬼かアンタっ!?!?」

ひょっとして、自分はもっとタチの悪いやつらに捕まってしまったのではないか。

そんな鬼畜にドナドナされている気がしてならないダイゴは、思わず檻に手をかけてしまうほど、今すぐに馬車から降りたい衝動に駆られる。

「失礼ですね。全く、ラジラジは礼儀も教えていなかったようですね」

「いや礼儀以前の問題だろ!? ていうかラジラジって誰だよ!?」

ここで彼の記憶がないことと、さらに今世では彼の主である【跳躍王（キングリープ）】とは面識がないことを察するネネカ。

少々当てが外れたが、【七冠】とそのプリンセスナイトは切っても切

れない関係にある。いずれ、ラジラジから接触してくるだろう。ネネカ自身がそれに当てはまるからこそ、確信めいた予感があった。

「……それに、シャルルの作戦には穴がありました」

「あん？」

指定の合流地点まで時間があるからか、それともこのまま鬼畜扱いされるのも彼女自身の沽券に関わるからか、ネネカはダイゴにネタばらしすることにした。

なぜ、あそこまでシャルルを煽ったのか。それにはちゃんと理由もあった。

「【王宮騎士団（NIGHTMARE）】で最も厄介な者の対策が甘いのですよ。何やら事前に根回しして来ないようにしていたようですが、それで操作できれば苦労はしません」

彼が一番それをわかっているはずですが、と若干責めるような言葉を口にするネネカ。

実際にどのような対策をしたのかを、結局彼は説明しなかった。故に、この作戦を万全にするために、ネネカは一計を講じたのだ。

「だからこそ、シャルルには一番目立ってもらう必要がありました」

時は少し遡る。

マサキが能力でバグを起こした魔物を放つ前のこと。

何の変哲もない山道に、暴風を纏いながら見事な三点着地を決めた男が、この地に降り立った――――――！

「うっし！　ギリギリ着地！　見てたかネネカ……っていねぇし!!!」

当然である。

ネネカは今頃、マサキの背中に座りながら悠々と降下しようとしていた。

「ちっくしょう、せっかく俺がパラシュートなしのスーパーヒーロー着地を決めたっていうのによ。アイツ絶対見てねぇだろ」

愚痴は言いつつも、個人的には１００点中、９５点レベルのカッコいい着地ができたためか、シャルルはどこかホクホクとした表情であった。

嵌められたことは自覚しても、すぐに自己陶酔に移ることができるのが彼の強みであった。

さてと、と言いながら周りを見渡す。

目的の山道の看板が立てかけられてるのを見つけて、頭の中で地図を広げる。

「ちょっと着地地点ズレちまったか。まあ、そこまで遠くはないし、走れば余裕か」

「随分と面白い登場の仕方じゃないか。門番をサボって暇つぶしに来た甲斐はあったな」

「おっ、わかる？　いやあ、実はこっそり練習して――――――」

シャルルの言葉は最後まで続かなかった。

気がつけば――――――看板とキスをしながら吹き飛ばされていたからだ。

遅れて、轟音が聞こえてくる。

何本もの木々をなぎ倒しながら滑空し、ようやく地面に引きずられた頃には、彼の景色は山の中にある広場に変わっていた。

「――――――っっっぶねぇぇぇ!?　死ぬかと思った!!　殺す気か!?!?!?」

軽いパニックに陥るシャルル。背中の鈍痛が思考を乱すが、それでも腰に携えた剣を抜く。

自分が吹き飛んだ後を辿った方向に、波うった刃の剣先を向け、戦闘態勢を整えた。

「無論、殺す気だとも。しかし、今のを受けてその程度とは、オマエさてはできるヤツだな？」

「……ああ、まあな。世の中には絶対に攻撃を当ててくるやべーやつとかいるから、これくらい対応できな――――――」

「ほう、それはどこのどいつだ？　ワタシみたいなヤツが他にもいるなんて、意外とワタシも世間知らずだったか？」

シャルルの言葉はまた途切れる。

今度は攻撃されたわけではない。

反応のないシャルルに対して、まあいいか、と流す人影。高貴な黒いドレスと、それに不釣り合いすぎるほど物騒な剣を担ぎ、土埃の舞う広場に現れた金髪の女。

騎士と呼ぶにはやや血の気が多すぎる彼女こそ、ネネカが〝厄介な相手〟と称した相手。

「さて――――――狂乱の宴を始めようか！」

「あ、死んだわ」

クリスティーナ・モーガン。

千里真那側に与する【七冠】――――――【誓約女君（レジーナゲッシュ）】であった。

宴の始まりであればぬかねばならぬ

見通しが悪い山ほど、迷うものはない。

小規模な凸凹道を通っても、木々が生い茂っているような山中では視界が制限され、変わり映えのない景色は、人間の方向感覚を著しく狂わせる。遭難者の大体は、自分が登っているのか、降りているのかすら曖昧になってしまったために起こり得るものだ。これが冬の雪山であれば、死亡率は恐ろしい程に上昇する。

「ネネカ様！　ノウェムが戻って参りました！」

『お疲れ様です、ノウェム。足止め、ご苦労様でした』

「へへっ、ネネカもマサキも上手くやったな」

故に、彼らの合流地点もそのような山の中に決めた。【王宮騎士団（NIGHTMARE）】を撒くには、そのような危険が伴う場所でなければ追いつかれてしまう。

虎穴に入らずんば……というほど、彼らにとってもリスクのあることでもない。ネネカの分身が山の一部に変化すれば、仲間たちが迷う心配はないからだ。

この変身はネネカの力の大部分を使ってしまうが、かの【迷宮女王（クイーンラビリンス）】や【覇瞳皇帝（カイザーインサイト）】でも直接確認しなければ看破することは困難を極めるはずだ。今頃、【王宮騎士団（NIGHTMARE）】は馬車を置いてきた平原の方を捜索していることだろう。結果、事前に待機していたマサキはともかく、陽動を終えて撤退したノウェムも遅れたが無事に合流できた。

トモ、と言ったか。あの新米騎士を撒くのに時間がかかったからだ。荒削りではあったが、あの速さには目を見張るものがあった。それに加え、ノウェム自身も居ないはずの相棒頼りな立ち回りをしてしまったせいもある。前ならアイツが目くらましなり何なりして、さっさとトンズラすることができたのにな、と感傷的になるノウェムであったが、悪い癖だと思考を切り替える。

「――――――っと、久しぶりだなダイゴ！　元気にしてたか？　アタシは元気だぞ！」
「あ？　ンだお前？」

今回のターゲットであったダイゴに声を掛ければ、やはり怪訝な反応が返ってくる。
……わかっていたし、慣れていたつもりだったが、それでもノウェムは気分が落ち込む。一時的な共闘ではあったが、それでも一緒にあのプリンセスナイトと戦った仲だ。悲しくないはずがなかった。
そんなノウェムを見てか、変身を解いたネネカは背後から声をかけた。まるで母が娘を元気付けさせるように。

「彼もプリンセスナイトです。オクトーと同じように、時間をかけて戻していきましょう。彼に試す前にいい実験になりそうですし」
「っ、ああ！」
「……おい、今実験っつったか？　俺、もっとヤベェやつらに捕まってんのか？」
「よかったなダイゴ！　正直、私は少しお前が羨ましいと思っている！」
「コイツはコイツでヤベェな……」

満面の笑顔で被検体扱いを是とするスチャラカ野郎にドン引きする中、ノウェムはついぞ現れなかった我らがギルドマスターの姿を探した。

「あれ、シャルルはどうしたんだ？」
「必要な犠牲でした」
「嘘だろ!?　着地ミスったのか!?」

しれっと顛末だけを口にするネネカ。

何ともアホらしい死に方をしたものだと思ってしまったノウェムであったが、その思考も突然の地響きによって中断させられた。
木に止まっていた鳥類の魔物たちが、逃げるように騒ぎながら散らばり始める。
何事か、とノウェムはネネカに視線を送れば、その答えは簡単に返ってきた。

「誤解を招かせてしまったようですね。彼ならクリスと戦闘になりました」
「クリスティーナ……！」

げぇ、と露骨に顔を歪めた。
ネネカと同じく、【七冠（セブンクラウンズ）】のひとり。
【誓約女皇（レジーナゲッシュ）】ことクリスティーナは、前世と同じく千里真那の下にいた。
記憶を失っているせいもあり、こちら側に引き入れることは無理だろうと、ギルドとしては接触は避けていた。
にもかかわらず、こうして遭遇してしまったわけだ。一同は、作戦の立案者のシャルルが会議の後にポロッと言っていたのを思い出した。

『クリスぅ？　バッカ、アイツがこんな詰まらない作戦は参加しないだろ。ついでにアイツの家に商人や貴族たちを経由させて、開拓地産の稀少な茶葉を送っておいた。作戦中は門番とか言っておいて王女陛下サマと仲良くティータイムしてるさ』

あと、なぜかわからんが真那のヤツは俺とクリスは会わせたがらなかったから今回も大丈夫だろ、とも言っていた。思えばこれがフラグというものであったとも知らず。
前世と今世では【覇瞳皇帝（カイザーインサイト）】と【誓約女王（レジーナゲッシュ）】の関係性が少々変わっていたこと。

たとえ団長や陛下の命令でも反故にするレベルに、クリスティーナが日々に退屈していたこと。
楽観視していたシャルルの誤算は、この二つが大きな要因であった。

「マサキ、ノウェム、私達は先に戻りますよ」
「はっ！」

自分の蒔いた種だ。目的は果たしたのだから、あとは好きにやればいい。ネネカは踵を返し、当然のようにマサキはそれに続く。

「……しゃーないか。ダイゴ、また【王宮騎士団（NIGHTMARE）】に捕まるかもしれないし、とりあえずアタシたちの拠点に来ないか？」
「いいのかよ。仲間置いていくのか？」
「ネネカが大丈夫って言っているし、大丈夫だろ」

投げやりにのようにも聞こえるが、ノウェムは本心から口にしていた。
確かに、相手は敵勢力の実質的なナンバーツーだ。
一応、こうなることを誘導したのはネネカであるが、別に使い捨ての囮として扱っているわけではない。このメンバーでは最も勝算が高いからこそ、合理的に判断しただけだ。
彼らは、誰一人として己のマスターが負けると考えていなかった。

「オマエは覚えていないかもしれないけどさ――――――昔、クリスティーナがマスターをしていたギルドがあってな」

ノウェムが、懐かしむように語りかける。
【ラウンドテーブル】――――――現実世界のクリスティーナと、プロのゲーマーたちで構成され、この世界に限らずあらゆるゲームの世界大会を席巻していったチームである。

元はクリスティーナが趣味で作った団体であったが、結果として実益も兼ねてしまったという稀少な例。それがアストルムでもひとつのギルドとなり、前の世界では一大ギルドとして名を馳せていた。

「そんなプロのやつらと何度も抗争していたギルドがあったんだよ。オクトー……アタシの相棒は〝ヘンタイの集まり〟とか言ってたけど」

しかし、アストルムにはそんな【ラウンドテーブル】に対抗するギルドがあった。

ただその日を面白おかしく生きられればいい、と言う考えのもと、強敵としてクリスティーナたちと抗争を仕掛ければ、互角に覇を競い合っていた。

「大丈夫だ！　アイツが一番、クリスティーナの相手をしてたんだ！　今回も何とかなる！」

強大な力を持ちながらも、世界の覇権にも、ミネルヴァにも興味を見出さず、純粋に【レジェンド・オブ・アストルム】というゲームを楽しんでいた者たち。

そのギルドの首魁こそ、今のノウェムたちのギルドマスターなのだから。

◆◇◆◇◆

ひとたび剣を振れば、それだけで山が削れる。

繰り返していけば、本格的に地図を描き直さないといけないところであったが、擦り傷の跡は次第に中腹から麓の方へと動いていった。

「ほらほら！　逃げてばかりではつまらんぞぉ！　せっかく美人が

誘ってやってるんだ！　エスコートするのが騎士ってものだろう？」
「っはぁー!?　逃げてねぇし！　見晴らしの良いところに行きたかっただけだし！　勝手な解釈やめてくれませんかー！」

鐘を鳴らすかの如く反響する轟音と、後からやってくる衝撃波は土煙をあげながら地面を抉る。
シャルルとクリスティーナの衝突は、片手剣同士が衝突して生まれるようなものではない。二人の間で暴風が吹き荒れては、近くに潜んでいた魔物を吹き飛ばすほど。局地的な災害が出来上がるほどの戦いは、既に常人の次元を遥かに超えていた。

「あっははは！　素晴らしい！　団長ほどの重さや堅さはないと言うのに、なかなかどうして傷がつかない！　既に四肢が千切れてもおかしくないはずなんだがなぁ！」
「傷はついていなくても痛えもんは痛えんだ――――――――よぉ！」

上段から振り降ろしたシャルルの剣――――――――否、一瞬にして剣が槌に変形したのを見逃さなかった。
後退してそれは空を切るが、今度は地面が盛り上がり、棘のような岩山がクリスティーナの目前に襲いかかる。

「飛んでいけ！」

岩の向こうから、今度は剣を振われる。
剣にまとった炎が岩を包み、小型の隕石のようにクリスティーナに襲いかかる。

「こんなもの！」

この程度の攻撃であれば、彼女はその権能で〝絶対に〟避けられる。細かく散った隕石は、クリスティーナを避けていくように通り過

ぎる。
視界が確保されれば、今度はどこか空気が乾燥するのを感じた。見れば、岩山の向こうにはさらに大きい氷塊が出来上がっている。
「――――――頭冷やしな！」
風を纏ったハルバードを突き立てて吹き飛ばす。
枝分かれすることなく、ビリヤードのように一直線にクリスティーナへと発射されるも、今度は物量をものともせずに手に持った剣で叩き切られる。
「岩と炎ときて、今度は氷と風か。
……なんだオマエ、実は魔法使いなのか？」
「どうだろうな？　そら、もういっちょ燃えろ！」
逆手に持った剣から炎の斬撃が飛翔する。
かつての自分の前任者の顔が浮かんだクリスティーナであったが、これも己の斬撃で相殺する。
その勢いで踏み込み、シャルルへと肉薄した。
一瞬で距離を詰めて振り抜いた剣は彼の脇腹へと吸い込まれるように命中する――――――よりも前に、シャルルもクリスティーナの眉間に剣を振り下ろしていた。
命中するタイミングは全くの同時になる。
このまま振れば、互いに臓物をまろびだすことになるかの瀬戸際。クリスティーナが寸でで止め、鮮血が舞う前にシャルルが距離を離す。
「冗談だ☆　こんな剣捌きするヤツが魔法使いのはずないな！」
狂気的な満面の笑みとともに剣を地面に突き立て、一瞬だけ彼女の金色の長髪が舞い上がる。

空間にノイズのようなものが走る。
まさしく、それはギアを一段上げる合図。
本気ではあったが、ここからは全力での戦いをするつもりだと表していた。

「現出せよ――――――！」

対照的に、シャルルは空に剣を掲げる。
すると、背後から翼が生えたかのように扇状に広がる羽の装飾が施された細剣の軍隊が現出する。
その数にして、十二本。
全てが、彼の周囲に展開し、意志を持っているかのように、剣先は全てクリスティーナに向けられている。精鋭の小隊に囲まれているような錯覚を覚えたクリスティーナにゾクリと鳥肌が立つ。
恐怖？　否、これは歓喜。
このような命のやり取りこそ、退屈を嫌う彼女が渇望していたものなのだから。

「ははっ、十三刀流なんて初めてだ！　いいぞ！　もっと私を楽しませてくれ！」
「初めて、か……やっぱりお前が何も覚えていないの、なんつーか調子狂うな。実は自分から望んで忘れるようにしたってオチか？」
「む？」
「悪い、余計なこと言った。始めようぜ」

水を差すような言葉をぐっとこらえ、今度はシャルルの方が攻勢に出た。
間合いを詰め、足元へ振りぬいた剣は空を切る。
回り込むように避けたクリスティーナは、がら空きになった背後へと回避不能の攻撃を放とうとする前に、宙に浮く細剣が襲いかかった。

彼女の権能で回避すれば、今度はまた別の剣が。
それも防御すれば、次はシャルルから鋭い突きが放たれる。
宙に浮く方の細剣を遠くへ弾き飛ばしたり、真上に飛ばされても、戻るまで残りの剣群がフォローに入る。反撃の隙を与えない手数の多さによる攻撃の密度は厄介極まりない。

「嘗めるなよ」

が、どれもクリスティーナの決定打にはなりえない。全方位に向けて剣を振れば、木々ごとシャルルたちが吹き飛ばされる。
当てるつもりはなかったため防御されるが、あくまで牽制も兼ねた攻撃だ。
仕切り直しをする――――――――前に、彼女の頬に水滴が落ちてきた。

「雨？」

上空を見上げれば、太陽が昇ったまま。
雲も純白で、雨なぞ降る気配はない。
ただ、先程真上に吹き飛ばした細剣が、空中に止まったまま剣先からスプリンラーのように水を噴射していただけだ。
クリスティーナは奥歯を砕きそうになるほどに歯を食いしばる。
彼女の権能――――――【絶対攻撃、絶対防御】は、周囲のあらゆる情報を瞬時に計算、なおかつ不定的な乱数を都合の良い調整し、あらゆる〝絶対〟を導き出す異能だ。故に、【乱数聖域】とも呼称される。
だが、雨天時では機能不全に陥る。
雨粒ひとつひとつを無意識に計算してしまい、神がかり的な情報処理能力を持つクリスティーナでも限界に達するからだ。

「ツマラン小細工だな！」

この状況が偶然で出来上がるわけがない。
つまり、敵は彼女の弱点を知っていることを意味していた。しかも、想定よりも遠くに弾き飛ばしてしまったせいで、クリスティーナの射程距離外で固定されてしまっている。全力で跳躍しても、届くかわからない高さだ。

「ああ、小細工だよ。けどな、これで少しでもそのチートが不安定になればこっちのもんだ！　ちょっとカッコ悪いけどな！」

一部分の、それこそ本当の雨や雪が降る時よりも圧倒的に範囲が小さいため、完全に封じることはできない。
けれど、ほんの少しだけ攻撃を浴びせられる隙ができれば、シャルルとしてはそれで良いのだ。

「勇士たち、突貫せよ！」
「ちっ」

雨よりも力強く降り注ぐ細剣群。
地面に着弾した瞬間、陥没が出来上がるほどの威力。ここで初めて、舌打ちしながらクリスティーナは自分の身体能力のみで後退しながら回避を行う。
好機と見たシャルルは、口元に笑みを浮かべた。
手に持っていた方の剣を投擲する。だが、それは何とか発動した権能によって当たることはない。彼の狙い通りに、地面に突き刺さり、雨によって濡れた地面一帯――――――クリスティーナの靴ごと一瞬で凍らせた。

「なっ、氷か！」
「ダメ押しだ」

一歩踏み込み、地面に突き刺さった細剣を一本手に取る。
さらに一歩踏み込み、クリスティーナが回避できない体勢になる角度に潜り込む。
そしてもう一歩踏み込み、心臓めがけて突きを放つ！
上空からは小さな細剣から雨が降りしきる。
地面は足ごと氷漬けさせられる。
死角から、その身を串刺しにしようとしてくる男の剣。
絶対絶命の窮地――――望むところだ。
退屈していた中で、よくもこんな劇薬と出会ってしまったなと歓喜した。
この状況下でも、彼女は狂気的に笑う。
「いいだろう！　ならば真っ向勝負だ！」

この程度の窮地は何度も切り抜けてきた。
権能の不安定になっているというリスクがあっても、喜んで賭けに乗ろう。
先ほどの投擲を避けた要領で、再び権能を発動させようとする。今度は敵を屠るために剣を振るうために。
幸い、わざわざ相手の方が自分の距離に近づいてきてくれているのだ。不調であっても、そこから〝絶対に攻撃が命中する道筋〟を計算することなぞ容易い。
あとは、全力の一撃を叩き込むだけだ――――！
「両断してやろう――――《乱数聖域（ナンヴァーズアヴァロン）》！」
噴火と聞き間違うほどの轟音とともに、土砂が空へと噴出する。山に潜んでいた鳥という鳥たちが、逃げるように一斉に飛び立った。

◆◇◆◇◆

「これは酷いな……」

ジュンは、目の前の光景を見て絶句しそうになる。

その場所に駆けつけたのは、異形の魔物を全て撃退した後のことであった。

嵐が過ぎ去った跡のように木々は倒れ、地面は削れ、ところどころ焦げくさい臭いが鼻を刺激する。痛々しく抉れた地面を辿っていくと、ジュンの見知った顔が写った。

「クリスちゃん？」

「……おお、団長か」

いつものような飄々とした態度は鳴りを潜めたクリスティーナが、倒木に座りながらひらひらを手を振る。

なんでここにいるのか、門番の役割はどうしたのか、色々と聞きたいことはあったジュンだが、それよりもクリスティーナの姿が姿だけに、心配の気持ちが何より勝ってしまう。

「怪我はないかい!?」

「待て待て。確かに早く帰ってシャワーに飛び込みたいくらいに泥だらけだが、特に怪我はしていないぞ」

「あ、本当だ。良かっ……良くはないけど、うん、無事で何よりだよ」

相変わらず毒気が抜かれる人の良さに調子が狂うクリスティーナだが、己の上司にあたる人物に事の顛末を語った。

門番と称して陛下とお茶会をしようと思ったが、肝心の陛下の機嫌がすこぶる悪いため中止となり、暇で暇でしょうがないから遠征組に合流することにしたこと。

その際に空から不審な騎士が降ってきたため尋問。今回の襲撃犯の首謀者と判明し、交戦したこと。

地形が変わるほどの激戦の果て、手傷を負わせたはいいものの、逃

げられてしまったこと。

「追いかけようにも、このような状態ではな」

「足が……ない？」

「感覚はあるし、別に切られたわけではないんだが……いかんせん立てん。正直、団長が来てくれて助かったよ」

クリスティーナが脚を伸ばすと、膝から下がまるで幽霊のように透けていた。

初めて見る光景にぎょっとするジュン。

どうなったらこうなるのか全く見当のつかない、それこそ、目の前のクリスティーナが使用する異能ほど不可解な現象を目の当たりにしていた。

それともうひとつ、不可解な現象が。

「どうした団長？」

「いや、ここまでやられた割に、クリスちゃんにしては大人しいなーって思っただけだよ。妙にスッキリした表情してたから」

「ああ、それか」

自分でもそう思うと、クリスティーナは頭を抱える。お気に入りの服をここまで泥だらけにされ、しかも敵にまんまと逃げられたこの状況。普段の彼女であれば憤りの果てに何かに八つ当たりしてもおかしくない。

「……ワタシがこうなったことに不思議と納得できるんだ。初めて相対する敵だというのに、ほんの少しだけ懐かしいなんて思ってしまったよ。どういうことだろうな？」

まあそれはそれとして次会ったら倍返しするがな、とケラケラ笑うクリスティーナは、ジュンの知るいつも通りの彼女であった。

とにかく、このままにはしていられないと、ジュンは脚のないクリスティーナを背負い、部隊の合流地点まで運ぶ。
普段ならこれでも一悶着になるはずだが、今のクリスティーナは甘んじて身を委ねる。

「それで、クリスちゃんはどんな奴と会ったんだい？」

ジュンは肝心なことを聞き忘れた、と言いながら尋ねた。むしろそこを最初に聞くべきだろうに、とどこか抜けている上司に呆れながら、最後の打ち合いの後のことを回想する。

『かつて俺の勇士……ギルドメンバーの使っていた武器だ。殺傷能力はないが、肉体（アバター）の脚部のデータをしばらく消失させる。どんなに大きい魔物でも転ばせる奇跡の槍だ。そのうち戻るから安心して寝てろ』

いつの間にか細剣を、歪な形の槍に変えていた男。つまり、元より相手はクリスティーナを斬り捨てるつもりはなかったわけだ。
クリスティーナとしては殺す気で放ったと言うのに、何たる侮辱かと思ったが、男には男なりに別の意図があった。

『……お前とはなんというか、何のしがらみもない状態で戦いたいんだよ。【ラウンドテーブル】と【十二勇士】の皆で、誰にも邪魔されずに、仕事だのミネルヴァだの何だの考えないで、ただ純粋にアストルムってゲームを楽しみたいんだよ、俺』

言っていることの半分は聞いたことのない単語ばかり。しかし、クリスティーナには不思議とストンと落ちていく。要は、こんな形で戦って決着をつけても満足できない、という意味だった。

『つーわけで今回は引き分けにしようぜ、クリス。また退屈になったら軽くでいいなら相手して――――まあいいや。じゃあ、またど

こかであったらよろしくな！』

そんなことを言いながら、怪我人とは思えないほどの駆け足で去っていく。見れば、通った道の地面には血痕が点々としていた。

理由はわからないが、最後の全力の一撃は男に傷をつけることができたらしい。単にあれは、本当は死ぬほど痛い中で自分が強がれる限界が来たから急いで帰ったとわかってしまった。

ほら、そんなアホ相手に怒りを覚えることすら馬鹿らしくなるだろう。

「次会ったら、そのアホ面を切り刻んでやるとしようか――――――〝親衛隊長〟殿」

「ん、何か言ったかい？　クリスちゃん？」

「今この状態で団長の首元に剣を突き立てれば、一体どんな反応をしてくれるかなと考えただけさ♪」

「クリスちゃんは相変わらずだね。この調子で、私と一緒に今回の任務失敗を怒られてくれると有り難いかな」

「断る☆」

この後、ボロボロのクリスティーナを見て、珍しく皮肉なしに心配したトモと一悶着があるが、それはまた別の話。

「……なあ、何で先に帰ってるんだよ？　俺、言ったよな？　ちゃーんとみんな集合してから、お家に帰りましょーって、言ったよな？　なんで先生の言うこと聞いてくれないのかなー？」

一方、そのアホ面の男は自力で拠点へと戻った後、腹の傷の痛みと仲間の薄情さに涙していた。

あれだけの強敵とシノギを削ったと言うのに、出迎えてくれたのは苦笑いを浮かべるノウェムだけであった。

「いやだってネネカがさぁ……」

「……ネーネーカー？」

「状況判断です。それよりもはやく着替えてください。血と泥の臭いで不快です」

「それよりもまず先に俺に言うことあるよな？」

「おかえりなさい。よく頑張りましたね」

「……おう」

ひょっとしてネネカはこのままクリスティーナと相討ちしてくれれば良かったとか考えているのだろうか、と悪魔的な考えが過ぎっていたが、シャルルはそれはないと切り捨ててしまった。

シャルルが消えれば、この拠点（ギルドハウス）も消える。あらかじめそれは説明している以上、何の用意もなしにそのような愚策を彼女がするはずがないだろう。

……断じてチョロくはない、と自分に言い聞かせながら、羨ましそうな視線を送るマサキを無視する。

「よぉ、アンタがギルドマスターだな？」

と、今度は筋肉質な強面の男が話しかけてきた。

こうして対面するのは初めてになるが、彼が今回の標的（ターゲット）であるダイゴであった。

「ああ、俺がギルドマスターだ。俺が、ギルドマスターだ」
「なんで二回言ったんだよ」
「悪い、ちょっと自信がなくなりかけてた」

同情するような視線を送られるシャルル。
見た目はヤンキーでも、倫理や常識が備わっているようでホッとしながら、ダイゴにこのギルドの目的を伝えた。

「俺達の目的は以上だ」

その上で【跳躍王(キングリープ)】のプリンセスナイトである彼を同じ陣営に入ってもらいたいと、シャルルは話を終えた。
やはりというか怪訝な顔をされてしまうものの、すぐに彼らしい好戦的な笑みに戻る。

「あっち(現実)とか、こっち(アストルム)とかわけわかんねぇけどよ、いいぜ乗ってやる。また心置きなく暴れられるんなら文句はねぇ」
「うっし、これからよろしくな！　また一緒に戦えて嬉しいぞ！　あとはオクトーだけだな！」
「オクトー？　ああ、なんか相棒とか言っていたヤツか」

一気に賑やかになる拠点(ギルドハウス)。
遠くから眺めれば、ある種の同窓会のように思えてしまう。全てが全て元通りになったわけではないにせよ、それでも小休止にはなる。
既に【王宮騎士団(NIGHTMARE)】へと介入した。
つまり、偽りのユースティアナ王女――――――千里真那への宣戦布告を意味しているのだから。
こうして彼らは、本格的に活動を開始させた。
元の世界に戻るために。己の目的を達するために。

「まあ、何にせよだ！　ようこそ【アストルム帰宅部】へ！」
「おい、何デタラメ言ってるんだよ！　アタシたちは【天楼覇団剣】だって言っているだろ！」
「いいや！　【ネネカ様を崇める私～その他とともに～】だ！　往生際が悪いぞ二人とも！」
「マサキまた名前変わってんじやねぇか！」
「このギルド大丈夫かよ……」
「同感です」

そして、このやり取りもいい加減鬱陶しいと思ったネネカによって、ようやくこのギルド名騒動にも終止符を打たれることになる。
名称が決まらないのは面倒だろうと、納得するしないにかかわらず説き伏せ、不平不満が残る中で彼らのギルド名は決まった。

――――【冠の王権（クラウンズレガリア）】と。

猫耳娘に耳が四つあるとぬけない

人は博打に惹かれる生き物だ。
一攫千金を夢見る者もいれば、ちょっとした小遣い稼ぎが目的の者もいる。最近は、側で観戦することが目的の者も少なくない。
楽しみ方はそれぞれあっても、スリルを求める者にとってリスクリターンの世界は、時に麻薬のように魅了されてしまう。
ランドソルでは、モンスターレースという娯楽が流行り始めていた。
魔物と魔物をレースで競わせ、着順を予想し、的中すればより多くの配当を受け取れる。現実でいうところの競馬である。
魔物を使うという特性上、有事の際を考えて民間人への被害が及ばない地下でひっそりと行われていたが、近頃は娯楽に飢えた国民たちでごった返していた。
王宮の施策により、劇場などの娯楽施設が件並み取り壊されている中、この競技は王宮公認であるため、刺激を求めた国民たちが流れ着いてきたわけだ。

「4番標識を超えて直線に入る！　ここで二番手のプリンニシテヤルノが伸びていく！　プリンニシテヤルノがぐんぐん伸びる！　内から先頭のゴメユイを躱すか！　躱すか――――――二頭並んだところでゴールイン！　そのあと四魔身空いてヘンタイフシンシャサンが三番手、マホマホクルリンパーが四番手になりました！」
「おーおー、賑わってんなー」

誰もが白熱したレースを繰り広げる魔物たちに釘付けされる中、客席の隅をシャルルは歩いていた。
クリスティーナの激戦で負った傷も癒え、活動を再開させた彼はランドソルへと向かっていた。
結論から言うと、アストライア大陸外での活動には見切りをつけた。ダイゴはもちろん、ネネカやマサキもランドソルを中心に活動し

ていたことから、他の【七冠】もアストライア大陸にいる……もしくはこれから来る可能性の方が高いと判断したからだ。他の大陸で、きな臭い情報がなかったわけではないが、前世でも今世でもソルの塔周辺、かのプリンセスナイト中心に事態が動いていく予感がしていた。

とはいえ、シャルルは堂々と表を歩ける存在ではない。かつて王宮勤めをしていたとしても、今では国家転覆を図ったお尋ね者にされていてもおかしくない。

そのため、ノウェムたちギルドメンバーが使っている潜入ルートを辿り、こうして地下の賭博場を経由しているわけだ。

……ギルドメンバーといえば、そういえば。

「【冠の王権】ねぇ……」

つい最近、ようやく決まったギルドの名前を復唱する。

【七冠】を擁するギルドとしては相応しいのかもしれない。しかし、わざわざ〝王権〟なんて大逸れた言葉を用いることにどこか引っかかるものがあった。

これでは〝【七冠】の中の王様〟を自称しているようにも感じられてしまうのではないだろうか。

その名付け親がネネカであれば尚更だ。彼女は【七冠】の誇りはあれど、己の得意分野以外の優劣にそこまで関心を見出さないタイプのはず。

では、一体何の意味があるだろうか……と考えれば、やはり事あるごとに〝神〟を自称する真那への当てつけしか考えられない。

もし本当なら、余程前世の裏切りを根に持っているのだろう。自分は二の舞を演じないようにしようと肝に銘じ、それはそれとしてカッコ良い名前だから由来は何でもいいやと思考を停止するシャルルであった。

閑話休題。

客席から外れ、実況も聞こえなくなる場所に出る。

周りを見れば、檻の中に入れられた魔物たちで囲まれていた。大小

分かれて積まれた檻の数々はまるでモニュメントのようだ。
「へぇ、グラスリザードやサンドボア……それにエルダーホーンやバーンザウルスまでいるのかよ。よく捕まえたなー」
レースという特性上、四足歩行の魔物が多かったが、中には大型のものまで取り揃えていた。
きっとこの催しの目玉にするつもりなのだろうが、目つきがまさに野生のままで、まだ調教は済んでいない。
いくつかはネネカとマサキの実験で見たことはあるが、こうしてバグが発生していないありのままの姿を近くで見るのは久しい感覚だった。
「誰かいるのっ!?」
「やっべっ！」
人の気配を感じたシャルルは物陰に隠れる。
探知よけのアクセサリーが手元にあるのを確認し、こっそりとその場を抜け出そうとする。
「探知も反応なし、っと。気のせいだったのかしら？　まあ、こんなところに来る物好きなんていないわよね」
「……」
聞き覚えのある声と姿に、動きが止まった。
物陰の隙間から覗けば、黒装束の獣人の少女が尻尾を振りながらホッとしていた。
一方、頭を抱えるシャルル。
その少女に見覚えがあるどころか、むしろ王宮を離れることとなったきっかけになった存在だからだ。

「……なんでアイツこんなところにいるんだ？」
「ふふん。前から訓練で使っていた森が使えなくなったから、あいつから教えてもらったこの魔物調教の仕事、割のいい副業よね！　〝陛下〟から下賜して頂いたプリンセスナイトの力を使いこなす訓練をして、さらにバイト代も貰える！　まさに一石二鳥！　〝陛下〟からお小遣いなんて貰えないし、ちょうど良かったわ～」
「マジか、特に聞いてないのに全部わかっちまったよ」

さっきまでとは別の意味で頭を抱えるシャルル。
環境が環境だけに性格は色々と荒んでいるが、根は素直な子だ。今のような迂闊なところも相まって、彼にとって少女――――――キャルは放っておけない存在だった。

「さてと、仕事仕事。さあ、私にひれ伏しなさい！」

先端に魔導書がつけられた杖を突き立て、その力を発動する。
彼女に与えられた能力は魔物の操作。
原則、本能で動く魔物を意のままに操ることができるプリンセスナイトの力だ。
同じく魔物に干渉するマサキの能力とは別方向の力だが、その気になれば軍勢を作ることすら可能になる。もっとも、元よりプリンセスナイトの力は男性が持つ力であるためか、彼女は使いこなせないでいる。

「ふふっ、高位の魔物も操れるようになってる。上達している証拠よね！」

とは言うものの、時折、面倒を見ていたシャルルからしても未だお粗末な出来だと思う。しかし、あらためて彼女の顔を見れば、随分と機嫌の良さそうな笑顔を浮かべている。
同じ職場（王宮）に居た頃、理不尽極まりないパワハラを受けている姿を傍

から見ていた身としては、それだけでも胸に込み上げて来るものがあった。
自分が居なくなった後でも、息災のようで何よりだ。
「……行くか」
であれば、わざわざ会う必要はないだろう。
後ろ髪を引かれるが、既にもう敵同士になってしまったのだ。キャルにも、シャルルの抹殺命令が出ていてもおかしくない。いきなり会って戦闘になるなんて、覚悟が決まっていないシャルルには些か辛すぎる。
「よしよし、良い子良い子……あ、いい事思いついたわ！　ちょうどエルダーホーンとバーンザウルスもいるし、大型の魔物を複数操る訓練もできるじゃない！　もしできるようになったら〝陛下〟もお喜びになるはず！」
「は？」
視界に入らないように通り抜けようとした矢先、すぐに足を止めてしまう。
猛烈に嫌な予感がする。
向上心があるのはいいことだろうが、気づいているのだろうか――――この手の能力に調子に乗って力を過信した者が辿るお決まりを、ストレートに突っ走っていることを。
能力発動中は無防備になることを忘れてしまっていなければいいのだが、
「……お、思ったより魔力持っていかれるわね？　ちょっ、暴れるな！　まだ片方の命令を入力している最中なのに――――――熱!?　うそ、集中途切れちゃ、ひゃああ!?」
「だああっ！　やっぱりかよコンチクショー！」

能力の行使が不安定になり、興奮状態になった魔物が檻を突き破ってきた。
お手本のような流れで窮地に陥るキャルを放っておけず、シャルルは魔物より怖い女相手に使用した歪な槍を投擲した。

◆◇◆◇◆

結論から言うと、魔物たちが脱走して暴れ回る前に、沈静化させることができた。
檻は熱で溶かされていたり、突進で曲がっていたりしたが、日曜大工さながらの突貫工事で直し、さらには魔法で強化する。これで暴れても逃げられることはない。

「だから能力使うときはその魔物の特性をしっかり調べてからにしろって何度も言ってるだろ？　無防備のまま襲われて食べられでもしたらどうすんだ？」
「ひゃい!?　ご、ごめんなさい！」
だが、もう一匹（シャル）の猛獣（ル）を前にキャルは完全に萎縮していた。正座して頭を擦りつけているのは謝罪の意志を示すためだけではない。単に顔を見上げたくないからだ。
目の前の男は、いつも緩い空気でヘラヘラしているくせに、本気で怒ると手がつけられないタイプである。キャル自身、神様同然に崇めている〝陛下〟に詰められている時がフラッシュバックし、今にも吐きそうなくらいの心境であった。
幸いにも、そんな時間は長くは続かない。

本気で怒るつもりがなかったのか、思ったよりもキャルが怯えていたせいで後ろめたくなったのか、ため息を吐いて腰を落とす。その気配を感じて顔を見上げると、シャルルは、困ったやつを見るような目で見ていた。

「ったく、挑戦するならせめて護衛つけてからやれって。お前、あれくらいの魔物なら仕留めるだけなら独りでもできるだろ。せめて無防備になる間の盾役がいれば、ミスった時でもどうにでもなるってのに」

「な、なーにが護衛つけろ、よ！　そもそも、アンタが居なくなるから独りで訓練しなきゃいけなくなったのに、何偉そうに説教してんのよ！」

「するわバカヤロウ。いい加減、お前が居なくなったら悲しむやつがいるって自覚持てって」

「えっ」

ようやく出た悪態も、純粋な善意によって一蹴される。

とはいえ、キャルも迂闊な行動であったのは事実だと認めざるを得なかった。いつも兄貴風というか、父親風をピューピュー吹かせてくることにはムズムズするが、助けられた身としては何も言い返せない。

そんなことよりも、だ。

キャルには真っ先に聞きたいことがあった。

「そもそも、アンタ今までどこにいたのよ？」

「は？　お前、アイツから何も聞いてないのかよ？」

〝陛下〟のことを『アイツ』とか『ヤロウ』とか呼称する、不遜で不敬な態度は相変わらず。

頭が高いと何度も言っているのに改善しようとしないのがこの男。忠誠心は勿論のこと、傍から聞いていても胃が痛むのでアレコレ注意

をした。しかし、改善する気はサラサラ無い上に、〝陛下〟からお仕置きされるのはキャルの方。理由は〝ピーピー煩い〟からとのこと。まったくもって理不尽である。

「聞けないわよ！　〝陛下〟、アンタが居なくなってからいっつもご機嫌斜めだし、あたしが帰ってきたら物凄い形相でこっち睨んでくるのよ！　あんな状態で何を話せっていうのよ！」

「ほーん、へぇー、そーなんだなー」

諸用で、しばらくランドソルを離れていたキャル。

王宮に戻ってきた時、何やら復興作業が淡々と行われていて、何事かと思って駆けつけたら、ドス黒いオーラを纏って睨んでくる主人（マナ）の姿が。

あの時のキャルは本気で死を覚悟したというのに、この男は大変だったんだなぁとヘラヘラしていた。

ムキー、と杖で殴りかかる。

しかし耐久力の差か、防御していないにもかかわらず、傷一つつかないどころか、キャルの腕が痺れるだけ。まったくもって理不尽である。

「まあ、ほとぼりが冷めるまでは顔出さないほうがいいと思うぜ？　ヘソ曲げたアイツ、距離を置いて時間経たないと直らないし、ご機嫌取りは諦めろ」

「でも、あたしが能力使いこなせるようになったって、いいニュースを持っていけば少しは……」

「マジでやめておけ。トぶぞ？」

この時のシャルルは全力で首を振っていた。

何が、とは聞かないことにする。地位（クビ）かもしれないし、文字通りの首（くび）かもしれない。とりあえず、妙に実感のこもった言葉に、黙って頷くことにした。

話が逸れた。
そもそも今の話は、シャルルが何をしていたかだった。
言動から察するに、どうやらランドソルから遠く離れたところにいたらしい。であれば、これも知らないだろうとキャルは魔導書を開く。

「なんか街中で手配書回ってるんだけど」
「手配書？」
「これよこれ、懸賞金までかけられてるわよ」

本当にランドソルから離れていたんだな、と思いながら転写魔法で撮影した手配書を投影する。

「どれどれ……何だこれ、頭悪っ」

懸賞金であるが、ゼロの数が異次元すぎる。
国家予算どころか、国全体に回っている金をかき集めても届かないような桁数が、紙面の隅から隅まで埋め尽くされている。殺意の表れなのかもしれないが、頭が悪いヤツから見ても頭が悪い内容であったことは今証明された。
そんな頭の悪いヤツをジト目で睨むキャル。
一体何をやらかしたのか教えろ、と目で訴えた。
一方、シャルルは逃げ場がないことを悟ったのか、地面に胡座をかいて説明する。
どうせ、何かの誤解か、しようもないことなのだろう。
キャルは高を括っていた。故に、端的な結論を聞いただけで卒倒しかけることになる。

「〝陛下〟と喧嘩したぁ!?」
「おう！　そりゃあもう派手に殴り合ったぜ！」

キラリ、とシャルルの白い歯が光った。
抗う俺はカッコいいだろ、目で訴えているシャルル。先程、「トぶ」と言っていたが、こいつは物理的に空の旅をしてしまったわけだ。当然、キャルにはただの命知らずにしか見えない。

「偉そうにしてんじゃないわよ！　アホじゃないの!?」
「アホはやめろ！　本当のアホに失礼だろ！」
「本当のアホはアンタよ！　逆にアンタ以上のアホって誰よ!?　聞かせてみなさいよ！」
「おういいぞ！　失恋のショックが大きすぎて、全裸になって大陸中を放浪したヤツの話するか!?」
「ぜっ……!?」

曰く、長年求婚し続けた女性がいたのだが、どこの馬の骨とも知らない男と付き合い始めたことを知り、なぜか全裸になって各地を放浪し始めたとのこと。きっと、その男の脳が破壊されたのだろう。
その後、全裸のまま道中の国に伝わる銅像に跨ったり、全裸のまま素手でワイバーンを倒したりと紆余曲折あったが、最終的に女装した仲間が駆けつけてきたのを見てようやく落ち着いたらしい。なぜ女装するという発想が思いついたのか。きっとその仲間の男も脳が破壊されていたのだろう。
結果、失恋した男は露出癖を患い、それを止めた男は女装癖を患ったそうな。つまり悪夢の始まりである。
そんな風邪の引いたときに見る夢のような、突拍子のない話を聞かされたキャルは、宇宙に投げ出されたような錯覚を覚える。しかし、正気に戻るのは早かった。一周回って落ち着くことができたからだ。

今のシャルルは誰からどう見ても国家転覆を狙った大罪人である。
であれば、あの手配書は納得だ。

「どうせ、またアンタがつまらない意地でも張ったんでしょ？　はやく戻った方がいいわよ。ほら、あたしも一緒に謝ってあげるから」

その言葉に、シャルルはピクリと反応した。
今までの緩い空気が一変して、肌がチクリとヒリつく。

「お前、ほんと綺麗に地雷踏もうとするよな」
「な、何よ。何かあたし、変なこと言った？」

珍しく恩を売れる機会に恵まれたから、というだけの打算での提案だったのに、無意識にキャルの尻尾が膨らんでしまう。
〝陛下〟といい、この男といい、どこに地雷があるのか彼女にはさっぱりだった。
こっちの話だから気にすんな、とシャルルから言われ、話題は打ち切られる。今のやり取りは何だったのだろうとも思ったが、彼は彼でキャルに聞きたいことがあった。

「それより、お前の方はどうなんだよ。金足りてるか？　ちゃんと飯食ってるか？」
「金はこんなバイトしているんだから察しなさいよ。まあ、おかげさまで食べ物には困ってないわよ。虫とか魔物とか食わされるけど」
「虫」

聞き間違いか、と思われていることを察したキャル。
残念なことに、誇張抜きで事実だけを述べていた。

「なんなのあいつら！　アホリーヌは頭おかしいくらいに悪食だし、コロ助は世間知らずの主さまバカだし、あいつは記憶喪失のくせに意

味分かんないくらい顔広いし、あのギルド頭おかしいんじゃないの!?」

『ヤバイですね☆』とスチャラカな笑顔のまま、慣れた手つきで魔物を捌く監視対象その一。

その様子に疑問を持たず、主の着替えを手伝う田舎者のエルフの少女。

そして、その年端もいかないエルフの少女から甲斐甲斐しくお世話されているくせに、外に出ればいつも誰かしら女の子と共にいる監視対象その二。

〝陛下〟自らが監視しろと仰るからには、自分には計り知れない事情があるのだろう。そう信じて何とか付き合っているが、いざ思い返せば不満がボロボロと出て止まらない。

「ははっ、いいじゃねぇか。楽しそうで」

「ど！　こ！　が！　よ！」

にもかかわらず、シャルルはどこか嬉しそうにしている。頭おかしいのかと思ったが、よく考えなくてもこの男は頭のネジが外れた人間であった。

シャルルの言葉に深い意味はない。

単純に、見たままの様子を口にしただけであった。

「だって、お前笑ってるだろ？」

彼が指差した先は、キャル自身の口元。

手を当てると、確かに口角が上がっていた。

……ああ、確かにそうだ。

いくら口先で取り繕っても、あのギルドに居心地の良さを感じているのは認めざるを得なかった。

「……別に。どうせあたしはスパイだし。仲良くしたって、後で辛いだけじゃない」
「考え過ぎなんだって。敵だからって仲良くしちゃいけないなんて決まりあるわけじゃないんだ。
……ま、人間、そんな単純に生きられねぇもんなのはわかるけどよ。気が合うんだったら尚更だ」

そうだ、そう簡単に割り切れるのであれば苦労はしない。
【美食殿】と、あの少年は超がつくほどのお人好しだ。良い意味でも悪い意味でも。
仲良くなればなるほど、スパイでいることに後ろめたさを感じさせる。裏切ることには心が痛む。
しかし、あちらに寝返ることは絶対にできない。キャルの中では〝陛下〟の存在は絶対であり、文字通り人生の希望だったのだから。
今のキャルは、腕と腕を掴まれて綱引きされているようなものだ。そのまま引き裂かれてしまいそうな胸の痛みは、果たして錯覚なのだろうか。

「……じゃ、またな」
「えっ、帰らないわけ？」
「ああ、あのヤロウがごめんなさいするまでは戻らねぇよ。達者でな」

ふっきらぼうに突き放し、シャルルは立ち上がる。
待って、と反射的に声が出てしまうキャル。
なんだ、と振り返ってくれる男の顔は、何か覚悟を決めた表情だった。

「その……今度、どこかメシ奢りなさいよ！　虫料理とか、魔物料理とかじゃなくて、ちゃんとしたもの食べないと、舌が馬鹿になるんだから、手伝いなさい！」

咄嗟に出てきた悪態に、シャルルは笑って手を振った。
……結局、〝陛下〟と喧嘩して出ていった後のことを聞き出すことはできなかった。
けれど、自分の知らないところで何か事態が動こうとしているような予感がする。
せめて次も会えるように、とつい口走ってしまった。
……ふと、キャルは彼が王宮にいた頃を思い出す。
自分が傅いている中、シャルルは〝陛下〟の隣に控えていた。そして、キャルは自分が去った後の謁見の間を覗き見するのが日課であった。
正門より大きい扉の隙間から覗いてみた二人は、互いに軽口……と表現するには毒が多めだが、険悪ではない、むしろ素を曝け出したやり取りをしていた。
嫉妬がなかったわけではないが――――――それ以上に羨ましかった。
もっと頑張れば、〝陛下〟は自分の前でもあんな顔をしてくださるのだろうか。
もっと成果を出せば、〝陛下〟たちは自分をあの輪に入れてくださるのだろうか。
もっと自分がちゃんとしていれば――――――
「はやく戻ってきなさいよ、バカ」
無理矢理連れ戻すなんて出来やしない。
かと言って、〝陛下〟のもとを離れることもできない。
結局、キャルに出来ることは、子猫のように声を出して待っているだけなのだ。
そして、檻へと押し込まれた魔物たちも回復する。
暴れるようなことはせず、ただ俯くキャルを眺めていた。

きっと、少しだけ檻が広く感じていたのかもしれない。

◆◇◆◇◆

「いや、マジで手配書回ってんのか……」

地上に出たシャルルは、久方ぶりのランドソルを散策する途中、掲示板に貼ってあった己の手配書を眺めながら呟く。偶然にも会ってしまった知己から聞かされていたが、こうして実際に貼られているのを見ると凹む。

ちなみに、彼は変装も何もしていないが周りは誰も気づいていない。懸賞金の現実的ではない金額故か、国民からはイタズラか何かかと思われているのだろうか。ひよっとしたら、堂々としているからこそ誰も本人だと気づいていないのかもしれない。

理由はどうあれ、巡回兵に気をつけながらであれば、街中を歩くことは問題ないと判断したシャルルはホッとした。

……断じて、手配書に書かれたシャルルの似顔絵が、本来よりも数割美形に描かれているから気づかないというオチではないと言い聞かせながら。

「ん？」

ふと、シャルルは自分以外の手配書を眺める。

そこら辺のゴロツキから【自分のことをユースティアナ王女だと思いこんでいる異常者】という尖ったものも散りばめられている中、気になったものがあった。

「……秘密結社【ラビリンス】か。

うーん、怪しい！　名前からして実に胡散臭い！」

ぼんやりと、その名前に縁がありそうな人物が思い浮かぶ。
しかし、その者は真実や虚構、ミスリードを二重三重にも仕掛けて、文字通り迷宮のような煙の撒き方をする厄介な人間だ。決めつけて探りを入れた結果、痛い目を見た経験は数え切れない。
どうしたものかと考えていたら、通信魔法が展開される。ノウェムからの連絡だった。
また相棒関係かと思ったシャルルだが、すぐに認識を改める。【ラビリンス】のことも気になるが、今は頭の隅に留めておくだけで、シャルルはその場を立ち去る。

――――――なんか、この世界に違和感を持っている感じのヤツを見つけた！　どうすればいいかわからん！　とにかく、ランドソルにいるなら合流するぞ！

彼女も彼女で、ちゃんと仕事をしていたらしい。
すぐ行く、と返したシャルルは街を駆け抜ける。
結局、離反の理由をキャルには言えなかった。
今も真那と例のギルドで板挟みになっている中で口にするのは、さすがに心労が増えそうで憚られた。
もう少し待っていてくれ。必ず俺が何とかしてやる。
言い訳をしながらも、覚悟を入れ直し、鎧を鳴らしながら走り続ける。
目指すは、少し特殊な事情を抱える孤児院へ。